

氏 名： 水谷 さおり
学位の種類： 博士（看護学）
学位記番号： 看甲第 11 号
学位授与年月日：平成 27 年 3 月 21 日
学位授与の要件：学位規則第 15 条第 1 項該当
論文題目： 母乳育児ケア尺度の開発とその関連要因
学位審査委員： 主査 柳澤理子
副査 山口桂子
副査 石村由利子
副査 岡本和士
副査 片岡純

論文内容の要旨

I. 研究背景

母乳育児を行う母親への医療者のかかわりについて、医療者側の視点での研究は行われているが、母親側の視点で詳しく分析された研究は少ない。本研究者は、修士論文において産後1か月目の初産婦を対象に、母親の情緒的側面・認知的側面に作用した医療者のかかわりを明らかにし、母親らが求めているケアを検討することを目的に、質的記述的研究を行った。この質的研究の結果を基に、母親の視点から母乳育児ケアを測定する尺度を開発し、母親の求めるケアが実際に提供されているかを測定することによって、母乳育児ケアの質を評価する必要があると考えた。

II. 母乳育児ケア尺度の開発（研究 1）

1. 研究目的

母乳育児ケア尺度を開発し、その信頼性と妥当性を検証する。

2. 研究方法

1) 母乳育児ケア尺度の開発

研究者の質的研究の結果をもとに、「楽しみや信念をもてるかかわり」「自立できるまでの一連のかかわり」「状況に応じて寄り添うかかわり」の 3 下位概念を設定し、質的研究結果を踏まえ母性看護の専門家らと検討しながら、アイテムプール 64 項目を作成した。

2) 研究対象

東日本大震災被災地の著しい被害があった施設を除く、全国の産科および産婦人科施設で、異常な経過をたどる対象者が多い周産期センターを除き、産科医療補償制度を導入している 2082 施設に研究を依頼し、82 施設より協力が得られた。必要サンプル数は、因子分析の項目数の 10 倍以上とし、回収率を 30%と考えると、2130 以上を配布することとした。協力が得られた施設の 1 か月の平均分娩数分 (2860

人)の質問紙を送付。そのうち1722人から回収し(回収率:60.2%)、この内、欠損値があった310人を除く、初産婦593人、経産婦819人、計1412人を分析対象とした。有効回答率は、81.9%であった。

また、同施設の産科・産婦人科病棟師長に対し、施設要因に関する質問紙を送付した。

3) データ収集方法

本研究では、研究に同意を得られた施設数が限られたため、尺度開発と関連要因の検討を同一の調査で実施することとした。

母親に対する質問紙は、母親に関する質問17項目(母親の要因、母親の母乳育児関連要因)、母乳育児ケア尺度64項目、基準関連妥当性の検討に用いる野口の母乳ケア過程尺度35項目、調査時点(退院～1週間後)の母乳育児アウトカムについての質問5項目(母乳育児経験の肯定的評価、母乳育児継続の意思、母乳育児の自信、母乳育児ケアへの満足度、調査時点の栄養方法)、以上を5段階のリッカートスケールで測定した。また、母乳育児ケア尺度項目については、必要であったか否かも同時に尋ねた。母親ともに正常な経過をたどっている母親に、退院3日前から退院当日までに無記名自記式質問紙を配布し、指定の回収箱に投函されたことで同意が得られたものとし回収した。

産科および産婦人科施設の病棟師長に対する質問紙は、先行研究において、母乳育児の継続期間と関連があるとされた施設要因として、病棟のスタッフ数・スタッフ経験年数構成・病棟の規模・分娩数・Baby Friendly Hospital (BFH) 取得の有無・スタッフの母乳育児に関する資格・退院時と1か月時の母乳率・行っているケア等の質問項目を尋ねた。

3) 分析方法

項目の必要度を検討した後、項目分析を行い、天井効果と床効果、I-T相関、GP分析、項目間相関を検討した。次に、探索的因子分析を行い、因子抽出法に最尤法を用いてプロマックス回転にて分析した。更に、検証的因子分析を行い、探索的因子分析にて抽出された因子構造を用いて、最尤法により分析した。信頼性の検討には、内的整合性の確認の為、尺度全体と各因子のCronbach's α 係数を求めた。妥当性の検討では、複数の専門家による内容妥当性の検討、因子分析による構成概念妥当性の検討を行った。また、理論的な関連が予測される野口の母乳ケア過程尺度との相関係数を求め、併存妥当性を検討した。

3.結果

64項目のうち、半数以上の母親が「不要」と答えた2項目を除外した。項目分析では、天井効果を示した38項目、床効果を示した3項目を除外した。I-T相関は、Pearsonの積率相関を用いて検討し、全ての項目が0.30を超え、除外する項目はなかった。GP分析は、有意水準を1%として検討し、1項目が $p=0.026$ であり、除外した。残った21項目について、探索的因子分析を行い、因子負荷量が0.40未満の項目を除外した結果、因子数3であることを確認した。モデルの適合度については、Kaiser - Meyer - Olkinの標本妥当性は0.943。Bartlettの球面性検定は $p<0.001$ で、モデルは良い適合度を示した。

探索的因子分析にて3因子を抽出し、理論モデルと合致していることを確認した上で、各質問項目を観測変数、潜在変数間に共分散を仮定したモデルを設定し、共分散構造分析を実施した。分析は最尤法を用いた。すべての観測変数に対して有意なパスが引け、標準化係数はすべての観測変数で0.55以上であり、3因子モデルであることが検証された。GFI 0.902、AGFI 0.874、NFI 0.914、CFI 0.923、RMSEA 0.076であり、総合的に良い適合度であった。

ケアの内容を検討して、母乳育児ケア尺度下位因子を「状況克服ケア」「要領獲得ケア」「動機づけケア」と命名した。それぞれ設定した3下位概念、「状況に応じて寄り添うかかわり」「自立できるまでの一連のかかわり」「楽しみや信念をもてるかかわり」に相当する内容であり、構成概念妥当性があると判断した。

尺度全体の Cronbach's α は 0.926、「状況克服ケア」8項目は 0.916、「要領獲得ケア」7項目は 0.863、「動機づけケア」3項目は 0.772 であった。野口の尺度総得点と母乳育児ケア尺度総得点との相関は $r=0.695$ 、「状況克服ケア因子」は $r=0.604$ 、「要領獲得ケア因子」は $r=0.660$ 、「動機づけケア因子」は $r=0.426$ であり、併存妥当性が認められた。

4. 考察

研究1では、母乳育児を行っている母親を対象とした質的研究をもとに構成した概念を用いて、状況克服ケア、要領獲得ケア、動機づけケアの3下位因子18項目からなる母乳育児ケア尺度を開発し、その信頼性、妥当性を検討した。内的整合性、内容妥当性、構成概念妥当性、基準関連妥当性を検討した結果、信頼性、妥当性が検証された。

III.母乳育児ケアの関連要因とアウトカム (研究2)

1.研究目的

母乳育児ケア尺度を用いて、母乳育児ケアの関連要因を、母親の基本属性、母親の母乳育児関連要因、施設の要因、の3要因において探索する。また、開発した尺度と母乳育児を行う母親の調査時点（退院時から1週間）の母乳育児アウトカムとの関連を検討する。

2.研究方法

1) 研究対象およびデータ収集方法：研究1と同様。

2) 分析方法

開発した母乳育児ケア尺度総得点および抽出された下位因子ごとの得点と、母親の基本属性、母親の母乳育児関連要因、施設の要因との関連を検討した。それぞれの関連要因については、カテゴリ変数は意味のある2群に分類し、またリッカートスケールは肯定群、否定群の2群に分類し、独立2群の平均の差の検定を行った。また、母乳育児ケア尺度総得点および下位因子の得点が、母親の調査時点の母乳育児アウトカムに関連するか否かを検討した。

3.結果

重回帰分析の結果、母乳育児ケア尺度総得点に有意に関連した変数は、年齢 ($B=1.629, \beta=.053, p=.007$)、入院中の夜間授乳 ($B=8.917, \beta=.241, p<.001$)、入院中の乳頭トラブル ($B=2.844, \beta=.322, p<.001$)、母子同室 ($B=9.703, \beta=.236, p<.001$)、分娩後の授乳開始時間 ($B=3.234, \beta=.105, p<.001$)、妊娠中希望していた栄養方法 ($B=2.247, \beta=.058, p=.004$)、パパママ教室における母乳育児の話 ($B=9.325, \beta=.216, p<.001$)、退院後2週間前後のフォロー健診（母乳相談） ($B=1.862, \beta=.130, p<.001$)、母乳育児に関する勉強会 ($B=1.335, \beta=.043, p=.033$)、病棟のスタッフ数 ($B=1.228, \beta=.040, p=.048$) の10要因であった。重相関係数 R^2 は.464、自由度調整済み R^2 は.461で、VIF値は1.008~1.212であった。下位因子の「状況克服ケア」に対しては9要因が、「要領獲得ケア」に対しては8要因が、「動機づけケア」に対しては11要因が関連していた。

母乳育児のアウトカムについては、母乳育児ケア尺度は、母乳育児経験の肯定的評価、母乳育児継続の意思、母乳育児ケアへの満足度に対しては、母乳育児ケア尺度総得点およびその3下位因子が、母乳育児の自信については、「要領獲得ケア因子」と「動機づけケア因子」が、また、調査時点の栄養方法（母乳群）については「動機づけケア因子」が、それぞれ有意に関連していた。

4.考察

研究2では、開発した母乳育児ケア尺度と関連要因および母乳育児アウトカムとの関連を検討した。母乳育児ケア尺度総得点および3下位因子のそれぞれに対し、関連する母親の属性、母親の母乳育児関連要因、施設要因が明らかになった。また、母乳育児ケア尺度は、母乳育児経験の肯定的評価、母乳育児継続の意思、母乳育児の自信、母乳育児ケアへの満足度、調査時点の栄養方法の5項目のアウトカムと関連しており、本尺度を測定することで、母乳育児アウトカムの向上につなげることができると思われる。

IV.結論

本研究では、母乳育児ケア尺度を開発し、その信頼性と妥当性を検証した。また、開発した尺度を用いて、母乳育児ケアの関連要因、およびアウトカムとの関連を検討した。開発した母乳育児ケア尺度は、母親が求める母乳育児ケア量を測定し、母親の求めるケアを提供できているか否かを弁別する上で有効である。また、母親が必要だと認めた62項目は、必要な母乳育児ケアのチェックリストとして用いることが可能である。本研究により見出された関連要因は、臨床における母乳育児ケアの質向上に応用できるものと思われる。

論文審査結果の要旨

平成27年2月11日、第1回博士論文審査委員会を開催した。愛知県立大学大学院看護学研究科学位審査規定第13条および看護学研究科博士後期課程の学位に関する内規第14条、第16条に基づき、審査委員5名で博士論文審査を行った。

本論文について、研究プロセス、データ収集、分析方法が適切に行われ、論旨が一貫していることを確認した。同時に、海外文献の検討、研究方法の記述、表と本文の一致等について、一部追加および修正の指摘があり、修正を踏まえて最終試験に臨むこととした。

また、副論文として次の2編を確認した。

- 1) 水谷さおり, 高橋弘子, 恵美須文枝. 母乳育児を行う初産婦の情緒的側面・認知的側面に作用した医療者のかかわり. 愛知県立大学看護学部紀要. 18, 19-29, 2012.
- 2) 水谷さおり, 岡田由香, 山口桂子. 初めて母乳育児を行う母親の情緒的側面に作用した家族のかかわり. 家族看護学研究. 20(1), 13-25. 2014.

平成27年2月18日、愛知県立大学大学院看護学研究科博士後期課程の学位に関する内規17条に基づき、50分間の公開最終試験を実施した。

同日、第2回博士論文審査委員会を開催し、論文審査および最終試験の結果を総合的に審議した。

本論文は、母乳育児を行う母親に対して、助産師をはじめとする医療者が提供した母乳育児ケアを測定する尺度を開発し、その信頼性・妥当性を検討するとともに、開発した尺度を用いて、母乳育児ケアに影響を及ぼす要因、および母乳育児ケアとアウトカムとの関連を検討した研究である。

妊娠中には母乳育児を望む母親が圧倒的多数を占めるにもかかわらず、産後は多くの母親が混合栄養に切り替えつつ、少しでも母乳を与えようとしている現状を踏まえ、必ずしも完全母乳に拘らず、医療者の価値観に基づくのではなく、母親が必要としているケアを提供できているかを測定する尺度を開発しようという問題意識から本研究は開始された。

国内外の先行研究を検討し、母乳育児に対する母親の知識や自信、自己効力感、満足度などを測定する尺度、完全母乳を行おうという意思の程度を測定する尺度、ソーシャル・サポートニーズを測定する尺度などは開発されているが、医療者のケアを評価する尺度は、非常に少ないことを確認した。唯一と思われる母乳育児ケア提供を測定する尺度が日本で開発されているが、医療従事者の価値観に基づく尺度であったため、母親自身の視点とニーズに基盤を置いた母乳育児ケア尺度を開発した研究内容には、独創性、新規性が認められる。

本論文は、1. 母乳育児ケア尺度を開発し、その信頼性と妥当性を検証する、2. 母乳育児ケア尺度を用いて、母乳育児ケアに関連する要因および母乳育児ケアとアウトカムとの関連を検討する、という2段階で構成されている。

研究1. 母乳育児ケア尺度の開発と信頼性、妥当性の検証

修士で行った質的研究の結果をもとに、「楽しみや信念をもてるかかわり」「自立できるまでの一連のかかわり」「状況に応じて寄り添うかかわり」の3下位概念を設定し、母性看護の専門家らと検討しながら、アイテムプール64項目を作成した。母親自身に対するインタビューを基に帰納的に作成されたため、母親の実際のニーズに即したアイテムを収集できたと思われる。

全国の産科、産婦人科施設で周産期センターを除く2082施設の中から、82の協力施設を得て、1か月の予想分娩数2860の自記式質問紙を配布し、1412人の母親から有効回答を得た。サンプル数は因子分析をはじめとする多変量解析を実施するのに十分であった。

尺度の開発は、各項目の分布と記述統計の確認、項目分析、探索的因子分析、内定整合性の検討、検証的因子分析と段階を追って行われた。また、母乳育児領域の専門家による内容妥当性の検討、因子構造に基づく構成概念妥当性の検討、医療者の視点に基づいているが母乳育児ケア提供を測定している尺度との併存妥当性の検討が実施され、最終的に18項目3因子からなる、母乳育児ケア尺度を開発した。

尺度開発は、認められている尺度開発の手順に則って、段階的に丁寧に行われた。探索的因子分析、検証的因子分析における説明量、モデルの適合度、内的整合性は十分であり、「状況克服ケア」「要領獲得ケア」「動機づけケア」と命名された3つの下位因子は、設定した3下位概念に相当するものと認められ、内容妥当性、併存妥当性の検討も適切だと認められるものであり、尺度の信頼性・妥当性は検証されたと認められる。

研究2. 母乳育児ケアに関連する要因および母乳育児ケアとアウトカムとの関連

研究2は、1. 開発した母乳育児ケア尺度によって測定された母乳育児ケアに関連する要因の検討、2. 母乳育児ケアと母乳育児に関するアウトカムとの関連の検討、の2つの内容で構成されている。

母乳育児ケアの関連要因の検討では、先行研究を検討し、「母親の属性」「母親の母乳育児関連要因」「施設要因」の3領域において、関連すると思われる変数を抽出し、2変量解析で関連を検討した後、重回帰分析を行った。その結果、母乳育児ケア尺度総得点、「状況克服ケア因子」「要領獲得ケア因子」「動機づけケア因子」のそれぞれに対する関連要因が明らかになった。検討は、データの分布を確認しながら丁寧に行われており、関連要因として提示された項目は、母親の年齢や出産経験、乳頭トラブルや夜間授乳など手がかかる状況、病棟のスタッフ数や母乳育児指導への熱心さが伺える施設の要因など、納得のできるものであった。

アウトカムとの関連では、母乳育児経験の肯定的評価、母乳育児継続の意思、母乳育児の自信、母乳育児ケアへの満足度、調査時点における栄養方法（母乳の継続）の5つをアウトカムとし、肯定群と否定群との間で、母乳育児ケア尺度総得点および3下位因子得点を検討し、それぞれ関連があることを確認した。特に母乳育児の自信や、母乳を実際に継続するためには、動機づけや授乳の要領を獲得できることが重要であることを見出した。

以上より、本研究は修士で実施した研究を発展させ、また先行研究を検討した上で研究のデザインがなされており、研究目的に対して十分なサンプル数を収集しており、分析方法および結果の解釈は適切かつ論理的にできていると判断した。質的研究を基に実際の状況に応じたアイテムを帰納的に丁寧に抽出したこと、十分なサンプル数を得たことが、明確な分析結果に結びついたものと思われる。本研究で開発した尺度は弁別力に優れていると思われ、今後、施設の母乳育児ケアの質検討に、あるいは下位因子を比較することで各側面の充足性の検討につなげることが可能であり、発展性が認められる。

公開審査では、審査委員から、本尺度の臨床への適用方法、本尺度が正常な経過を辿る母親に対してもつ意味、併存妥当性に用いた尺度と比較してのオリジナリティ、本研究の今後の発展性等について質問があり、適切な回答がなされた。また、サンプルの偏り、本尺度の時間的安定性に関する検討困難性など、本研究の限界について自覚しており、今後の検討課題についても述べられていた。

以上を総合し、学位審査委員会では、本論文は、研究の独創性、新規性、発展性、先行研究の適切な活用、研究デザイン及び方法の適切性、データ収集と分析の適切性、論理性、看護への示唆等、内規に定められた項目について基準を満たしており、母性看護学および助産学領域における看護の実践・研究の発展に寄与する学術上価値ある論文であり、博士（看護学）の学位を授与するに値するものと判定した。